

中部の

エネルギーを 築いた

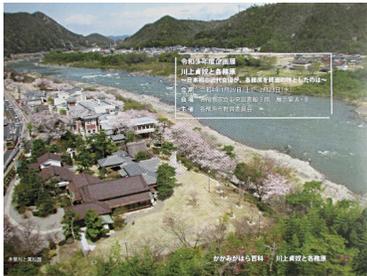
人々

福沢桃介と川上貞奴をめぐる人々 (その2—川上貞奴と各務原)

川上貞奴生誕150年を機に「川上貞奴と各務原～日本初の近代女優が、各務原を終焉の地としたのは～」をテーマにした企画展が岐阜県各務原市立中央図書館3階民俗資料館で開催された。

福沢桃介は木曾川ライン下りのほとりにある景勝地、各務原市鵜沼が気に入って、1928(昭和3)年に鵜沼宝積寺地区に大遊園地を建設する計画を発表したが、この壮大な計画は実現しなかった。

この辺りは、1914(大正3)年、今渡から犬山に到る木曾川下りを楽しんだ地理学者の志賀重昂が、この地がドイツのライン川に似ているので「日本ライン」と名付け観光地として脚光をあびていた。



企画展「川上貞奴と各務原」のリーフレット

貞奴は晩年、各務原を終焉の地とし、人生の集大成として「貞照寺＝金剛山桃光院貞照寺」を建立、さらに貞照寺に参拝するための別荘として「萬松園」を建てた。

今回は、筆者が企画展を鑑賞する機会を得たのでその概要を報告する。

各務原市歴史民俗資料館が企画展で編集した「かがみはら百科・川上貞奴と各務原」に基づく展示項目は、下記の通り3章12項目から構成されている。

第1章 日本一の芸妓「奴」から日本初の近代女優「貞奴」に

1 葭町一の売れっ子芸者「奴」

貞奴は、1871(明治4)年、両替商を営む小山久次郎の12番目の子として生まれた。維新後の混乱で家業が倒産したため、7歳にして日本橋葭町の芸者置屋・浜田屋の女将・可免の養女となった。明治16年12才で雛妓になって「子奴」と名乗った。

1885(明治18)年、千葉県成田山まで馬に乗って参詣に出かけた帰り道、野犬の群れに襲われ、それを見た慶應義塾の岩崎桃介が棒切れと石で追い払った。これを機に貞は桃介と交際するようになった。しかし桃介は福沢

諭吉の次女・房と婚約しアメリカに留学したため、貞の初恋は実らなかった。

1887(明治20)年、16歳になった貞は、初代総理大臣・伊藤博文が後盾となり、「奴」と名乗り売れっ子芸者となった。

その後、1894(明治27)年、「オッペケペー節」で一世を風靡した新派劇の創始者・川上音二郎と結婚し芸者の世界から離れた。

2 女優貞奴の誕生 ヨーロッパで貞奴旋風

音二郎の新派劇は好評であったが、新劇場「川上座」建設の借金が嵩み、日本で興行す



横山多賀治
1885(明治18)年～1963(昭和38)年
出典:かがみはら百科
「川上貞奴と各務原」

ることが困難となった川上一座は新天地を求めアメリカに向かった。

欧米では女役は女性が演じるのが当たり前で、男性が演じるのは気味悪がられていたので、貞は仕方なく女優となり、ここに芸名「貞奴」として日本初の女優が誕生した。

川上一座は途中、興行主に売上金を持ち逃げされるなど多くのトラブルに会うが、貞奴はニューヨーク婦人倶楽部の名誉特別会員に表彰されるなど好評を博した。その後イギリス公演から、1900(明治33)年パリ万博開催中のロイ・フラー劇場で公演した。そしてルーベ大統領は宮殿で園遊会を開き、一座は「道成寺」を公演し、多大な喝さいを受け、貞奴は一躍パリ社交界のトップレディとなった。「ヤッコ」服が流行し「ヤッコ」という香水も発売された。さらにアンドレ・ジイド、イサドラダンカン、ピカソなども貞奴の演技を絶賛した。

3 女優養成所の開設

帰国後、音二郎は相模湾に面した茅ヶ崎に伊藤博文によって名付けられた「萬松園」を建てた。そして女優を続けるつもりはない貞奴を拝み倒し、「オセロ」「ベニスの商人」「ハムレット」などを演じ、その地位を確立し、女優としての評価を高めていった。

1908(明治41)年、近代演劇の発展と女優の地位向上を願い、女優養成仮事務所を開設した。帝国劇場開設発起委員長で社長の渋沢栄一は、創立賛助費と補助金を出すことを決め、帝国女優養成所と定めた。養成所には予想を上回る応募者があり、森律子など15人が採用された。

4 音二郎の死と女優引退

1910(明治43)年、川上夫妻個人経営の大阪帝国座が開設された。しかし翌年になると音二郎は体調を崩し腹膜炎で亡くなった。

貞奴は追善興行のため日本各地を回ったが、1917(大正6)年、音二郎の7回忌を機に引退声明を出し、「ともかくも隠れ住むべき野菊かなー貞奴」の句を白磁の茶碗に藍色で焼き付け、引退興行の配りものとした。

コラム (COLUMN) 岐阜にも来た貞奴一座

1914(大正3)年、岐阜美殿座で、貞奴一座の公演があり「トスカ」「照手姫劇」「夜の鶴」などを演じた。5月13日付の岐阜新報は「トスカは高尚過ぎて田舎向きではない」と評した。また翌年に再び岐阜で「サロメ」「八犬伝墨高楼」を公演した。

第2章 桃介との木曾川電力開発物語

1 二葉御殿

福沢桃介は木曾川電力開発事業の壮大なプロジェクトがあり、そばにいて支えてくれるパートナーを必要としていた。この頃二人は急接近し、1919(大正8)年、名古屋市東区東二葉町に二葉居を建てた。赤い洋瓦を屋根にいただいた威風堂々たるもので、夜には庭園が照明によってライトアップされたその豪華さから人々は「二葉御殿」と呼んだ。二葉御殿には、政財界人が集まり、その接待を仕

切るのは貞奴であった。また、貞奴は一人の時間ができると南画を成木星洲に、書は後藤半仙に師事し「香葉」と号した。

二葉町時代の桃介は貞奴という絶好のパートナーを得て実業家として第1線で活躍した人生のフィナーレでもあった。

2 桃介の木曾川水力発電事業

1914(大正3)名古屋電灯㈱の社長に就任した桃介は木曾川の水力発電事業に乗り出し

た。賤母、大桑、須原、桃山、読書の5発電所を建設した。また、名古屋を中心に電力を多量に消費する事業を増やすために、電気鉄道、電気製鋼所、電気製鉄所などを設立させた。さらに大阪送電、木曾電気興業、日本水力の3社が合併した大同電力㈱を設立、取締役社長に就任、電力需要が多い関西方面に送電した。

3 電力王「福沢桃介」

福沢桃介が日本の電力王と呼ばれるゆえんは、1924(大正13)年に日本で最初のダム式水力発電所・大井発電所を完工させたことである。1922(大正11)年に起工したが翌年の9月1日、関東大震災が起これ、国内での資金調達が出来なくなり、1924年アメリカに向かい第1回:1,500万ドル、翌年、第2回:1,500万ドル計3,000万ドルの外債を発行し資金調達を図った。



大井ダム湖



大井ダム湖畔・さざ波公園にある
福沢桃介・川上貞奴像

4 女優引退後の貞奴

女優引退後の貞奴の夢は、①桃介と共に木曾川電力開発事業を成し遂げること ②絹織物の工場をつくること ③児童劇団を創ることであった。

大正10年、貞奴は名古屋市東区上飯田町に川上絹布株式会社を設立した。絹糸や絹布の製造、加工整理などを行っていたが第1次世界大戦後の不況などにより経営は悪化し、1924(大正13)年に解散した。

1924(大正13)年に「川上児童楽劇園」を発足させ、翌年、二子玉川に養成所を新築した。養成所の辺り一面は桃の林に囲まれ、校章は桃、園生のバッジのデザインも桃であった。楽劇園の評判はよかったが、桃介の体調が悪くなると、貞奴も陣頭指揮をとることが難しくなり昭和7年に解散した。

コラム 「桃介の懐刀」と呼ばれた男 (COLUMN) 横山多賀治(各務原出身)

横山多賀治は大井発電所建設工事を陰で支え、桃介の懐刀と呼ばれた。

多賀治は1885(明治18)年に岐阜県各務郡大宮村(現:各務原市蘇原大島町)に横山忠三郎の四男として生まれた。明治43年に岐阜県庁に入庁後、大正4年に知事官房主事となり、県政を推進した。桃介の引き抜きにより、大正8年、大同電力の前身木曾電気興業㈱に入社した。

桃介は木曾川の電源開発には「開発計画着工時から、地域の協力を得るため、折衝に向き合う玄人の存在が必要である」との観点から、鉄道院総裁や通信大臣を歴任した後藤新平に頼み、増田次郎を入社させた。同氏は地域との折衝をすべて取り仕切り、やがて2代目・大同電力の社長に就任した。この増田次郎とともに、国、県、地域との折衝に当たったのが多賀治で、困難な問題を見事に解決し、見事にやり遂げた。多賀治の自宅には後藤新平から贈られた書「会古通今」や2女・真子誕生に贈られた貞奴

直筆の掛軸がある。

多賀治は昭和14年、当時の蘇原村長に就任、蘇原駅の開設など村の発展に尽力、昭和18年に初代・蘇原町長に就任した。

昭和19年、貞奴が鵜沼の萬松園に疎開すると、貞奴のために食料品や物資を届けた

りした。同氏は「淀君というのは貞奴みたいな人だったかも知れない。ビシッとしていた。」と家族に話していた。懐刀として桃介を支え、郷土の発展のために尽くした多賀治は1963(昭和38)年、享年77歳の天寿を全うした。

第3章 貞奴 各務原へ

1 金剛山桃光院貞照寺の建立

福沢桃介と川上貞は木曾川上流の発電所の水が中流域にある景勝地・鵜沼が気に入り、この地で人生最後を過ごそうと貞奴は寺の建設に着手した。

1931(昭和6)年に上棟式を行い貞奴と桃介が臨席した。大工は名古屋の宮大工・伊藤平左衛門で、寺は金子堅太郎によって「金剛山桃光院貞照寺」と命名され、初代住職に元新義真言宗智山派管長・滝承天僧正を迎えた。



貞照寺本堂

2 八霊験絵図

貞奴は自らの人生で不動明王から守られていると信じ、自らの人生で選んだ八つの場面を岡田如竹に描かせ、それを木版に彫らせ、参拝者が見られるように短い詞書を添え本堂回廊の外壁にはめ込んだ。

第一面は「水垢離之図」で、貞奴が雛妓になって間もない冬、養母・可免の難病を救いたがために極寒の深夜に水垢離をする場面

である。

第二面は「野犬に襲われるの図」で、成田詣での帰路、野犬に襲われた貞奴の乗馬が、前足を空にあがいていなくなき場面で、不動明王を念ずる貞奴と、たまたま行き合わせ助けた桃介との遠い日の出会いが秘められている場面である。

第三面は「箱根山中落下狼藉の図」で、奴時代に宵闇の箱根山中で悪漢に囲まれ、危うく難を逃れた場面である。

第四面は「馬術競技で落下したる図」で、貞女21歳、上野池之端で馬術競技に出場し、柳に母衣を引っかけて落馬したものの無傷だった場面である。

第五面は「相模灘に二間余の小舟で暴航する図」で、音二郎が選挙で争って負け、借金に追われた時に小舟で相模灘を漂い、下田に漂着した場面である。

第六面は「アシカの群れ襲来の図」で、鳥羽沖でアシカに追われ、貞奴が舳先で両手を合わせて拜んでいる場面である。

第七面は「興行資金手中に戻る図」で、ヨーロッパ巡業の支度金を神戸で人力車中に置き忘れたものの、不動明王の加護で手中に戻った場面である。

第八面は「大井ダム完成の図」で、1924(大正13)年、桃介の大井ダム工事の現場で、完成を記念する貞奴の頭上に不動尊の後光が差している場面である。

3 川上家別邸「萬松園」

貞照寺に参詣する別荘として、大井ダムに繋がる風光明媚な木曽川のほとりに萬松園の建築を始めたのは1929(昭和4)年のことで、内装や建具、数々の襖絵などの装飾に手間をかけ、昭和8年に完成した。敷地面積1,500坪、建坪150坪、一部2階建て、部屋数は26にも及ぶ豪華な数寄屋造りである。

邸の中で一番格式の高い部屋の襖に「木曾桃山飛泉」がある。この絵は桃介の名前をとって名付けられた桃山発電所にある隠れ滝「桃の滝」で、貞奴の絵の師匠でもある成木星洲画伯に依頼したものである。さらに「寢覚ノ床」の襖があり、木曽川電力開発に人生をかけた思いが感じ取れる。

この部屋の他にも、中国風の部屋、床がタイル張りになっているサンルーム、木曽川に向かって「流水に紅葉」の透かし彫り欄間がある小部屋、さらに最も意匠に凝った仏間な



萬松園入口



萬松園庭園

どがある。わずか3畳ほどの仏間の天井は羽衣を纏った美しい二人の天女が舞いながら散華をしている様が描かれている。

現在、国道21号線によって貞照寺と萬松園は分断されているが、この二つの建物は一体不二のコンセプトで設計されていた。

4 晩年の貞奴と桃介

桃介は1931(昭和6)年に貞照寺の地鎮祭に臨席した。晩年、萬松園に一度だけ訪れ、しばらく滞在し最後の参詣となった。

桃介は、1938(昭和13)年2月15日渋谷の本邸で死去、遺骸は多摩墓地に埋葬され、貞照寺の本堂に「大乘院蘇水桃介居士」という位牌が納められた。

貞奴は東京の牛込河田町に住み、1・5・9月の28日、不動尊の縁日ごとに萬松園に滞在、宝積寺から名鉄新鷺沼駅までは、近くの花屋ガリヤカーを引いて送り迎えしていた。

1944(昭和19)年、貞奴は姪のツルとツルの養女・玉起とともに萬松園に疎開、東京の家が戦災で全焼したので昭和20年12月まで萬松園で過ごした。

1946(昭和21)年、体調を崩し、療養のため熱海の別荘に移り、肝臓ガンで亡くなった。戒名は「貞照院孝順至道大姉」、遺骨は3回忌に貞照寺の靈廟に納骨された。



川上貞奴の靈廟

(寺沢 安正)